

# 引き継がれる思い

多賀佳子

聖母女子短期大学講師(東京都)

先月号の大久保由香里さんと初めて出会ったのは今年3月の日本助産学会学術集会でした。助産学会は、シンポジウムの出席者の1人であった九州工芸大学の波平恵美子先生の講演の言葉通り、『「無」から『存在』への橋渡しをしてきた助産婦』の集まりでした。そこで私たちの関係は「無」から「存在」になりました。

## なぜ助産婦になったのですか？

私が地元の薬科大学を卒業し、聖路加看護大学に進学した理由をよく聞かれます。それには私の生育歴が深く関与していると思います。

私は、明治生まれの祖母、伯母、大正生まれの母と続く開業助産婦の家の3人姉妹の次女として生まれました。姉の幼少時までは研修中の助産婦さんが家に住み込み、私の生活の中にも「入院さん」と呼んでいた入院中の妊産婦さんがいつもいらっしました。祖母の時代はもちろん家庭分娩中心で、自家用車ならぬ人力車で大阪の町を分娩介助にまわる祖母の話に胸がわくわく。また、一晚にあった分娩介助の件数の最高は14件、それぞれのお宅に助手さんを待機させ、分娩予測を立てながら伯母と母が夜の町を駆け巡る話にも手に汗を握りました(自分自身が深夜勤務の時にその大変さを実感)。

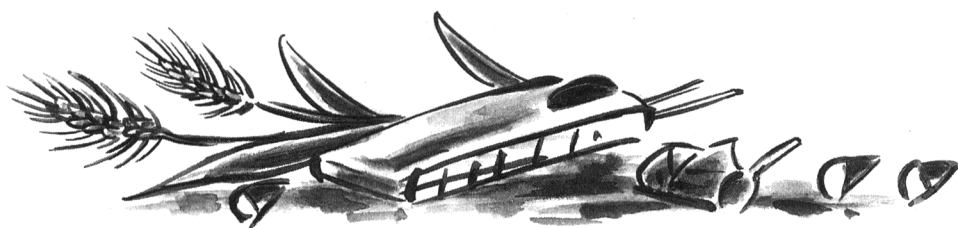
また入院分娩の比率が多くなってからは、家族7人と入院さんで、時には14人分の食事の準備と洗濯をすることもあり、圧巻でした。14個のオムレツを焼き上げた時の熱気や、8本の物干し竿に舞い踊るおむつを見上げた時の爽快感は、小学生の時のお手伝いの思い出として深く胸に残っています。

ずっと同じ場所で開業していたこと、また家が大阪の中心部で交通の便もよかったこともあり、子供の私たちの生活圏内にも多くの患家の皆さんがいました。小・中・高・大学の友人や先生の中にも患家がありました。小学3年生の時の転校直後、転校先の校長先生が突然わが家に来訪し、「あれ、先生？」の私の問いかけに「いやあ、孫が産まれてね……。部屋はどこかな、教えてくれるかい。あつ、その前に先生にお会いできるかな」には一番驚きました。祖母や伯母、母がどうして「先生の先生」なのかとても不思議な気分でした。

## 隠密受験？

そういう生活の中で私たち姉妹3人はそれぞれ薬学部に進学しました。誰かをあととりという願いも母たちにはあったでしょうが、特に圧力はありませんでした。その頃は漠然と「開業助産婦は確かに意義ある大切な職業。しかし、これからは今までみたいに家族全員での開業も難しい。家族生活を犠牲にしてきたことも否めない」と考えていました。それに、当時自宅通学可能な4年制の看護系大学はありませんでした。

薬学部4年生の時病院実習があり、そのときの経験が、やはり人間と直接関わる職業に就きたいと私に決心させました。そして進学情報誌で初めて聖路加看護大学を知り、こっそり入学願書を取り寄せて手続きをしました。受験票は幸運にも私が郵便受けをのぞいた時に届いていました。そして入試前日、初めて母たちに受験することを告げ、驚く両親を残し上京したのです。私の望みはかなえられ、魅力的で精力的な、素晴らしい恩師たちに出会えたことを心から感謝しています。



## 産婦として開業助産婦の母に出会う

友人がある工業大学のろくろ科出身なので、<sup>せい</sup>「聖路加=蒸籠科」と思ったという夫と結婚し、私は夫の理解と協力のもとに就職、大学院進学、第1子妊娠と道を進んでいきました。熟考の結果、自然に経過する出産であれば私にとって母が最も信頼のおける助産婦であること、また不幸にして途中で何らかの異常に移行するとしても、母が誰よりも(ME 機器よりも)早く、正確な予想・診断を下し、適切な対処ができる助産婦であることを確信し、母と伯母のもとで出産しました。

出産と産褥早期の里帰り中は、母と私の母娘関係の再出発でもあり、助産婦の大先輩としての母を再認識する期間でした。予想以上の長さで痛みで分娩第1期、有効にいきめず児心音を聴取する母の顔が真剣になった第2期、祝福と激励とともに案の定とがった頭の娘を母から手渡された感動の第3期……、まさに「いのち」を引き継いだ思いがしました。

また、分娩経過中や出産後には母といろいろな話をしました。母自身が姉を出産する時、分娩第1期の陣痛の中で他の産婦さんの分娩介助をしたこと、私の七五三の時はいつもお産が忙しく、母は夜になってから自転車の後ろに私を乗せて神社に向かい、誰もいない暗い境内で涙を流しながら私の成長を祈ったこと、たった1度だけ両親と私たち姉妹の5人家族が揃って行ったピクニックのこと、どんなに忙しくても朝になったら用意されていた遠足のお弁当やアイロンのきいた制服のこと……、どんな思いで私たちをこの世に産みだし、はぐくみ、いとおしみ、愛してくれていたのかを

考えると感謝しかありませんでした。そして、そういう思いの中で出産と子育てをした母だからこそ、開業助産婦としての今があるのだと痛感しました。

夜10時過ぎに乳房トラブルで来院した泣き顔の見ず知らずのお母さん、新生児訪問指導で知ってベッサリ指導希望で訪れたお母さん、妊娠反応を調べにきた女子中学生の2人連れ、4代にわたるおつきあいだったけれど、新しいお嫁さんの実家の意向による病院での誘発分娩の結果運悪く障害が残り、その後の療育の相談と次子のお産のために来宅する顔なじみのご家族などに出会い、やはり開業助産婦がdoing(援助すること)し、助産院がbeing(存在すること)し続けなければならないという思いを強く持ちました。

このような背景で2女の母になった助産婦の私にできることは何でしょうか。今私は助産学専攻の専攻科を持つ看護短期大学の母性看護学の教員です。直接助産婦教育に携わってはいませんが、看護基礎教育の中で母性看護のおもしろさを伝えること、冒頭の波平先生の言葉を借りると「無=白紙状態の学生」から「存在=助産婦志望の学生」への橋渡しをするのが今の私の役割なのかもしれません。そして、開業助産婦がdoing & beingし続けるために、これからの私にできることを考え、歩いていこうと思います。

\* \* \*

今回は、進学・就職のそれぞれの節目に、先輩として同僚として女性として、そのあるべき姿を示してくださった聖路加看護大学の森明子先生にバトンタッチします。どうぞよろしくお願いいたします。